1.

小中学校：  
　私が中学まで通った小中高一貫のインターナショナルスクールでは、現代西洋の教育に特徴的なリベラルアーツを謳いながら、実際的には多くの規律を含む隠れたカリキュラムにより生徒にある一定の行動規範への服従を促していました。  
　この学校では、いわゆる暗記勉強というような基礎的内容の勉強は一切授業で取り上げられませんでした。代わりに、思考能力と問題解決能力を養うことを目的とした授業が行われました。そこでは、生徒が先生にある問題を提示され、与えられた知識を応用してそれに対する解決を考案して、それを説明するという一連の流れを通して自由な思考を鍛えることが図られました。しかし、自由が保障されたのは授業内での創作活動の範囲内のみであり、ひとたびそこを出ると厳格な階層構造の中で生徒は先生への絶対的従順を強いられました。また、授業内の創作活動においてもあらゆる制約が存在し、学校側が標榜している内容とは裏腹に、自由なんて存在し得なかったのです。まず、成績の項目にすでに生徒の行動規範が明文的に示されていました。この学校は基礎学習のような授業を行わなかったため、学習内容の習熟度を示すような成績の項目は一つもなく、代わりに全ての項目が授業により示された行動規範（例えば批判的に物事を考察する、先生の指示に従う、グループで協力するなど）の達成度を測るものでした。また、成績の項目となっていた行動規範自体は明らかでしたが、その規範に則って行動しているか判断する基準は明示されておらず、各先生の恣意的な判断に委ねられていました。そのため、生徒が受け取る全ての成績に先生の価値判断が含まれており、生徒はいい成績を取るために先生の暗示的な要求に応え、それぞれの先生が掲げる理想的な生徒像に服従する他なかったのです。そのため、生徒は授業外での厳格な先生と生徒との階層構造で明示的な権力への服従を学び、授業内の自由創作では暗示的な権力への服従を学んでいました。  
　学校の価値風土も隠れたカリキュラムの成立に大きく関わっていました。この学校はキリスト教の、特にカルヴァン派的傾向の強い学校であったため、カルヴァン派的倫理観を持った人間が圧倒的多数を占めていました。もともと高所得者層向けの学校であったため、プロテスタントの教義の中の蓄財の肯定と資本増幅の正当化との相性が良く、富裕層を金銭的にもモラル的にも優れた存在として捉えていました。そのため、学校全体に富を努力と結びつけて敬意と憧憬の対象とし、貧しさを怠惰と結びつけて弾劾する意識がありました。金持ちの子供の金銭的放恣は正当な権利として後押しされ、貧富の分断を進行させました。また、保守主義的イデオロギーが宗教による倫理的な善と結びつき、その他の思想が悪として抑圧されました。特に左翼的イデオロギーは弱者の戯言とされ、度々弱さと悪は等しいものとされて、資本主義社会の弱肉強食の論理を絶対化した倫理観が学校の先生と生徒に共有されていました。このため、生徒は皆競争心が非常に強く、現実の資本主義社会を模した競争社会が学校内で成立していました。  
　これらの隠れたカリキュラムを通じて生徒たちは競争して社会的成功を目指し、そこにたどり着くための手段としての権力への服従を学んだのです。  
  
高校：  
　私の通った日本の高校の隠れたカリキュラムは主に授業内容や校則に濃く現れ出ており、その目指すところは小中までのブルジョワ教育とは対照的な位置にありました。  
　小中の授業が問題解決のための創造的な知識の活用に主眼を置いていたところ、高校の授業ではそれと真反対に基礎的な知識の暗記が授業の中心を成していました。覚える内容や学習の方法は全て教師によって生徒に明確に示され、生徒はそれに従順に従うだけの受動的な存在でした。規則も多く存在し、生徒の全ての行動が教師などの管理人により規定され、統括されていました。生徒の指導にあたって教師はよく「社会に出たら困るぞ」とか、「そんなんでは社会に通用しない」というセリフを使い、なるべく権威に従順な生徒を理想としていました。この時、生徒を大人から区別する基準として社会的生産性が導入され、社会とは離れた領域に生徒が存することを無意識に強調していました。また、このような教師の指導には学校の真の意図、つまり生徒を大人にすること（社会の歯車として産業に従事するようにさせること）が隠されています。人間は受動的な労働を通し、経済的生産力を獲得して初めて価値が与えられるかのような考えが浸透しており、それが教育課程の最終目標として据えられていました。

大学：

　早稲田大学の政治経済学部では自由放任型の授業と主体性を尊重した自由な校風が目立ちます。しかし、このような生徒の自由を尊重する姿勢には、生徒が自由を有効に使い、理想通りに動いてくれるという信頼があります。この理想というのは、他のどこにも引けを取らないエリートとして社会的成功を目指して努力することです。そして、このようなエリート意識はあらゆる場面において埋め込まれます。入学式をはじめとするあらゆる学部の行事や授業で「早稲田の看板学部」であることが謳われ、その成員は他より優秀であるという優越意識を刷り込まれます。このような優越意識を獲得した学部生は、特に後押しされずとも常に自身のさらなる優越を確立するために社会的成功を競うようになります。それは、自由放任にされても周りのプレッシャーと先生からの期待、自身の優越意識に応えるために勝手にさらなる高みへと登り詰めようとするからです。

2.

　小中学校は通っていた生徒が高所得者層の子供でかなりSESが高く、そのために学校の風土として蓄財を肯定し、富裕層を讃えるような傾向がありました。また、高いSESの生徒は将来管理職などの社会的地位の高い役職に就くことが想定され、そのための問題解決能力、管理能力、さらには会社等の構造的組織においての上位階層での振る舞いを教えることを目的として、リベラルアーツ的な授業や厳格な上下関係の強制がされました。

　高校では反対にSSEの低い生徒が多く、多くの規定や規則、権力に従順に従い、機械的に労働する労働者となるための教育が行われました。生徒の進路として良い大学、管理職などの地位の高い職業は想定されず、権威へ応えること、用意された道を進むことが教えられました。生徒は最初から自分たちの未来、社会的な成功を諦め、向上的競争心なんかは持ちませんでした。そして、学校はこのような傾向をさらに強めました。

　大学では、私大最高峰志望や有名国公立落ちのエリート志向の人間が多く、自然と高いSSEの人が集中しています。常に一番上を視野に入れ、周りを見下し、自身の価値を高めようという意欲的で競争心の強い生徒が多いため、授業の形態は自由放任であり、学校は自由な学習風土により生徒がアスピレーションを追うことを可能にしています。このようなSESの高い、エリート意識の強い生徒が集まるからこそ、「看板学部」としての政治経済学部の体裁が守られ、学校としてもその学部の生徒に大きく期待を寄せるようになるのでしょう。

3.

　私は、小中までの教育で問題解決能力と、社会的成功を目指す異常なまでの競争心が身につきました。これが、高校で刷り込まれた自律心と従順さと結びついた結果、早稲田大学に合格できたのだと私は考えます。具体的にいうと、少しでもSSEの高く、社会的に良いとされている大学に入りたいという向上的意識が、高校で教わった自律性と受動的な学習姿勢を受験勉強の方面で活用する動機となったのです。それにより、機械的に情報をひたすら吸収して、入学試験に備えることを習慣的に行うことで、早稲田の入試にも受かることができたのです。

4.

　早稲田の政治経済学部に入学し、周りの人間の高い志と先生から刷り込まれた優越意識に大きく感化されている自分がいます。早稲田の看板学部として周りに持ち上げられ、過大評価され、優位性を印象付けられることでその期待に応えなくてはいけないと焦りを覚えるようになりました。また、それに応える努力をしている内に、どこかでは恥ずかしながらも本当に自分の優位性を信じるようになってしまい、なおかつさらなる優位性を確立しなくてはいけない、常に上に立たなくてはいけないという「上」への執心が芽生えました。周りの人間で就職でも実績を残す人が多いので、自分もそのような大手企業への就職を志望するようになりました。このように、早稲田大学政治経済学部での隠れたカリキュラムは、私の競争心と社会的成功を求める向上心が強まりました。